千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ08
堀由樹子
えのぐの森

会期
2022年
7月13日（水）－10月2日（日）

アーティスト
堀由樹子

テーマ
五感でたのしむ

概要
つくりかけラボとは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間を作り上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。
第8回は、千葉市で育ち、現在も市内にアトリエを構える画家の堀由樹子さんをお迎えしました。堀さんが会場の壁一面に描いた木々とその枝に、来場者がつくった葉っぱや森の生き物たちがコラージュされ、日を追うごとに生命力に溢れた「えのぐの森」が生い茂っていきました。

つくりかけラボ

撮影：加藤健

いつもの森では、ざわざわと揺れる枝。うつろう光と影。ふわりとよぎる蝶。
絡まって伸びるつる草。葉陰の小さな虫。
湿った土の中にはきっと無数の微生物がうごめく。ガサガサと落葉をつつく鳩。
その中で、木々のすきまがつくる形と色をスケッチブックの四角で切り取る。
この夏は、鳥が落とした種から芽が出てつるがぐんぐん伸びてゆくみたいに、
子どもアトリエにみなさんの手による不思議な色と形の「はっぱ」をもりもりと繁らせましょう。
いきものの気配の詰まった森をつくるお手伝いにきてください。　　―― 堀由樹子

堀由樹子さんからのメッセージを受けて、夏のあいだ、「えのぐの森」にはたくさんの人が訪れました。「えのぐの森」には、いくつかのルール、仕組みが設けられました。まずは森の中をゆっくり歩いてみること。はっぱづくりのテーブルへ直行するのではなく、それまでの来訪者と堀さんがつくった空間を味わい、細部をながめてから、自分の制作に取り組むよう促されました。

オープンワークショップ

「はっぱのはりえ、はっぱのぬりえ ―森の部品をつくる」

7/13(水)～10/2(日)参加者数＝2,784人

来場者による「はっぱ」づくりは、いつでも参加できるオープンワークショップとして設計されました。葉の輪郭線がガイドとして印刷された紙(「はっぱの土台」)を色鉛筆やクレヨンで塗ったり、白紙にオリジナルの葉を描いたり、あるいは「森の部品(はっぱ)の部品」として用意された手づくりの色紙を使ってコラージュしたり。「森の部品」という表現は耳慣れないと思われるかもしれませんが、こうして来場者によって作られたはっぱを用いて風景を構成することにより、森全体が空間として育っていく、その制作方法と深い関係があるといえます。

会場で制作された植物や森の生き物たちは、最初は作者自身によって、やがては堀さんの手で、「えのぐの森」の然るべき位置に配置されました。「はっぱ」は堀さんの予想をはるかに上回る勢いで増え続け、夏休みが終わり、秋が近づく会期末には、豊かな森へと成長しました。

9月に入り、埋め尽くされた壁面を補うものとして、ビニールカーテンとボイド管が設置されました。これにより、空間に奥行きが生まれました。また、レイヤーの効果のおもしろさに呼応するように、「はっぱ」を個々ではなくマッス(塊)でとらえ、風景を構成していく様子が見られます。

「えのぐの森」を振り返る

普段は部屋に籠って絵を描いている私が、公開制作という場で更に来場者との交わりも取り込みながら、さて何ができるだろうと悩み始めた前年の夏。あれこれと相談を重ね、制作の準備運動であるドローイングブックのように子どもアトリエの壁面を描き進めることとなりました。

絵を描き慣れていない人でも「切ったり貼ったり」は夢中になれること、そこから魅力的なものが生まれてくることをこれまでに何度も見てきたので、まずはそれをきっかけとして、皆さんに塗り絵や貼り絵で森の部品(はっぱ)を作ってもらうことに。絵具の滲み模様をつけ、身近なものでフロッタージュした色とりどりの紙を、ふらりとやってきた方に気軽に手にしてもらえるよう配置し、用意していた紙が残り少なくなってきたらワークショップ参加者に同じ方法で増やしてもらいました。

来場した皆さんの手による「はっぱ(＋森の生きもの)」を、予め壁に描いておいた木の幹や草の蔓と組み合わせ、「えのぐの森」を夏の草木がぐんぐん伸びるように繁らせていくという流れで会期が始まりました。

夏休み期間ということもあり、予想以上の速さで壁は多くのはっぱでどんどん覆われていきます。恐る恐る始めたものの「楽しかった」という声もちらほらと聞かれ、普段自分勝手に描いている絵とは違うダイレクトな反応に手応えを感じる瞬間もありました。

初め「はっぱ」は壁の好きな位置に貼ってもらい、私が少しずつ描き足したりつなげたりテンポ良く進めていけるだろうと考えていたのです。が、蓋を開けてみると夏の蔓草のごとく猛烈に増え、手は追いつかず収拾不能の状態となり頭を抱えてしまいました。

たくさんの「はっぱ」には思わず見入ってしまうものもあって、これらを生かすため壁面(空間)全体の色や形のバランスを調整しながら、森を描くように描き進めたい、しかし全くできず途方に暮れた末、「はっぱの仮置き場」という仕組みを捻り出しました。「はっぱ」は一旦仮置き場に貼ってもらい、私がそこから良い組み合わせを選んで壁に配置していく、という方法に軌道修正したのです。これによって、少し気楽に絵を描くような進め方に転換することができました。と同時に、当然ながら自分が思い描く壁面のヴィジョンと、お客さんが楽しく作って好きな位置に貼ることは一致しないものなのだな、ということを認識したのでした。

隣の「はっぱ」との距離、向き、色合いなどを考えながら貼ることで、そこにあるものがつながって生き生きと見えるバランスがあります。傍から見ていて「あーそれはそこじゃなくて、こっちの方がすてきに見えるのに―」と思うけれど、ご家族で楽しそうにしているところへ余計な口をはさむのも憚られ、帰った後で少し位置を調整してバランスをとることも度々あったのでした。

膨大な数の「はっぱ」を貼っては描き足す過程は面白かったのですが、少し違った進め方をしたくなり、一番奥の壁は描く比重を増やすことにしました。美術館への道すがら目にしたヒガンバナの形、日頃スケッチに行く公園の太くうねった藤の幹など、思い切って普段の油彩よりも直截的に描いてみました。普段描いているのは抽象的、具象的のどちらともいえない形ですが、「えのぐの森」ではみなさんの「はっぱ」の強さに導かれて具体性を増したように思います。一人で画面に向かっている時には出てこない形態だったかもしれません。

会期が終わり、えのぐの森で生まれた「はっぱ」は新しいドローイングブックの中に棲み処を移し、今も少しずつ頁を埋めているところです。

堀由樹子(ほり ゆきこ)

1971年東京生まれ。1994年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。大学在学中はリトグラフを専攻。その後「描く」ことに専念したい思いから、素描、油彩を主に制作。
[主な個展] 2003「in the garden」ギャラリー千空間 東京(第7回資生堂ADSP選出により展覧会リーフレット作成) ／2011「窓の外」パーソナルギャラリー地中海 東京／2013「はれ 時々 くもり」人形町vision's 東京／2017「庭、前線」ギャラリーカメリア 東京／2020「空と森と、」千葉市民ギャラリー・いなげ 千葉
[主なグループ展や活動] 1994「大阪トリエンナーレ1994-版画」マイドームおおさか サントリー賞受賞／2001「Chiba Art Now'01 絵画の領域」佐倉市立美術館 千葉／2008「VOCA 2008 現代美術の展望ー新しい平面の作家たち」上野の森美術館 東京／2014　NHK Eテレ「キミなら何つくる?」第6回 えがこう!私の好きな図工室 出演／2017「クインテット3-五つ星の作家たち」損保ジャパン日本興亜美術館 東京
https://yhoririntam.wixsite.com/hori-yukiko

アーティストワークショップ

「えのぐであそぼう
―森の部品の部品をつくる」

7/18(月・祝)　参加者数＝27人
8/3(水)　参加者数＝23人
8/23(火)　参加者数＝20人

植物をはじめ、森の生き物たちをつくるための、コラージュ用の色紙をつくるワークショップを行いました。水彩絵の具のほか、水性色鉛筆、ダーマトグラフ、コンテパステル、クレヨンなどの画材と、数種類の紙が用意され、三つの方法「色でごしごし(フロッタージュ)」「スポンジ+プチプチ+…(スタンプ)」「水とえのぐのじっけん(滲ませたりぼかしたり)」で制作しました。水をたっぷり含ませた筆を画用紙のおもてに滑らせながら堀さんが呟いた、「絵の具が勝手にやってくれる」という言葉が印象的でした。
完成した表情豊かな色紙の数々は、しばらく乾燥させたあと、小さくちぎってオープンワークショップの素材に加えられました。

アーティストワークショップ

「とうめいお絵かき―森の部品をつくる」

8/11(木・祝)　参加者数＝24人

森や庭にやってくる生きものや花をOHPシートに描き、子どもアトリエの大きなガラス面に飾りました。
描きたいものを紙に下描きしたら、透明なOHPシートを上から重ねて黒いマジックで輪郭線を写しとります。油性のクレヨンやダーマトグラフで描いた上から水彩絵の具を塗ると、おもしろい効果が生まれました。また、水溶性クレヨンが生み出す独特の表情に、参加者は皆夢中になっていました。

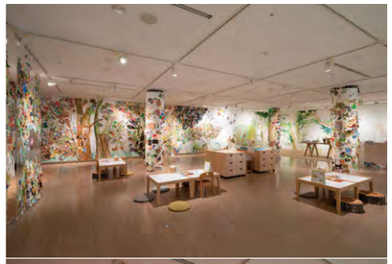
トークイベント

「風景、樹木を描くことについて」

9/19(月・祝)参加者数＝26人、出演＝堀由樹子、浅見貴子(画家)

画家の浅見貴子さんを迎えて、堀さんとの対談を行いました。ともに、風景、特に樹木をモチーフとして描きながらも、視点や手法の異なるお二人の制作の様子が、それぞれに披露されました。中でもスケッチについては、「枝ぶりを覚えるまでスケッチする」とおっしゃる浅見さんが、対象とする樹木を「設計図の気持ちで、忠実に、自分で考えなくても済むように見たままを描く」のに対して、堀さんにとっては「描くための準備運動のようなもの」。自分の中だけで画面をつくることによる行き詰まりを、自分では考えつかないようなかたちになって伸びていったりしている植物の様子をスケッチすることで、ヒントを得たいという気持ちは、お二人に共通することのようでした。

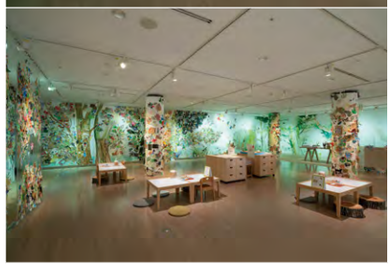
会期末を控えた9月後半には、美術照明家の竹下誠司さんによって、「えのぐの森」に四つの時間帯「昼間」「夕暮れ」「夜明け前」「日の出」が導入されました。照明演出により、時間だけでなく奥行きも生まれ、「えのぐの森」の新たな表情を見ることができました。



「昼間」

「夕暮れ」

「夜明け前」



「日の出」

オープンワークショップ

「はっぱ狩り―お気に入りを見つけて持ち帰ろう」

9/23(金・祝)～10/2(日)、参加者数＝カウントせず

夏休みの間にずいぶん賑やかになった「えのぐの森」。来場者は森の中を歩き、他の誰かがつくった植物や生き物をそれぞれに選び、持ち帰りました。持ち帰られた場所で、「えのぐの森」の部品＝ピースが新しい風景をつくり出すきっかけになることを願いつつ、プロジェクトは最終日を迎えました。

ワークショップとしての「えのぐの森」を考える

「絵画の人」である堀由樹子さんをつくりかけラボにお招きした直接のきっかけは、2020年の春に千葉市民ギャラリー・いなげで開催された個展*で出会った、いくつかのドローイング作品でした。伸びやかな線とみずみずしい色彩によってとらえられた樹木の枝ぶりと、移り変わる雲の表情に魅了され、描きとめられなかった前後の時間や空間に対する想像力が掻き立てられたことを思い出します。私はまた、千葉市内に制作の拠点を構える堀さんの目を通して、ごく身近な自然を眺めてみたいとも思いました。

堀さんにとって、目の前の樹木を見てスケッチすることが、自分の中からは出てこないような魅力的な形や色を手に入れる、絵画制作のための「準備運動」であるとしたら、「えのぐの森」を訪れる人々に課された、先行する他者の表現に触れてから自身の表現に取り組むという手順も、本質的には同じような意味合いを持つといえるでしょう。インプットからアウトプットへという流れを意識的につくり出そうとした今回のプロジェクトでは、私たちが自分だけのちっぽけな想像力を超え、他者の視点を借りながら思考と表現の幅を広げる機会を、場の仕組みとして設けようとしました。特に、夏休みということもあって、繰り返し足を運んでくださった方も多かったのですが、後日、堀さんの手で森の中に配置され、新しい文脈を与えられた自分の制作物と再会するという体験からは、さらなる気づきが得られたに違いありません。

一方、堀さんにとっては、自分以外の(そして自分ではコントロールできない)手によって、目の前に次々と差し出される形や色は、もしかしたら、スケッチを通して身近な自然の有り様から得られるヒントに近いものだったのかもしれません。会期終盤の公開制作を振り返ると、会場を訪れた人々の圧倒的な熱量と個性的な表現の数々が、画家のドローイング制作のモチベーションとして作用したようにみえます。「えのぐの森」では、この場に関わる様々な人同士のあいだで、何段階もの創造的な化学反応が引き起こされ、長い時間をかけて豊かな空間が育まれました。アーティストの表現の場であると同時に、ワークショップとしてのプロジェクト「つくりかけラボ」の姿を見ることができたと思います。

*堀由樹子「空と森と、」2020年2月6日(木)～23日(日・祝)

(山根佳奈・千葉市美術館 学芸員)

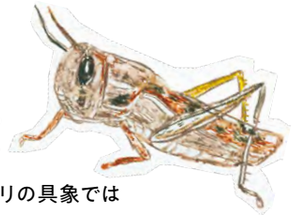
ホリの絵画のつくり方

北村淳子（きたむらじゅんこ、芸術学・宇都宮美術館）

夏の「つくりかけラボ」のプロジェクトが終わって秋になり、ホリ（堀由樹子）のアトリエを訪ねた。コロナ禍と諸々の事情で自閉している私にとって、久しぶりの現場である。ホリが2階のアトリエに、リクエストしておいた近作の油絵を数点並べておいてくれた。11月ともなると午後の光はもうすっかりオレンジ色。けれど、その光のつぶつぶがじんわり目に染みてきて、壁に立てかけられただけの素朴な絵画の美しさを照らし出してくれる。油絵の醍醐味である。

ホリは、知り合った頃からアクリルはほとんど使わず、いわゆる「油絵」を描いていた。当時はまだ学生時代の版画の仕事の名残のようなかっちりした要素もあって、画面の中の形と形のせめぎあいが私の目を引いた。特に気になったのは、いくぶん記号化したような木の形と、その影、あるいは画面に描かれていない他の木の影が、なぜか侵入してきて組み合わされているような作品。実体と影と、画面の外の別の実体の影（ややこしいけど）を、ないまぜにする、その野放図なアプローチが面白かった。

彼女の個展では、そういった油絵と同時に、少し唐突なふうに、かさばった「ドローイングブック」が展示されていることがあった。ブックの中のドローイングやコラージュは、もっと気楽に、描いたり上描きしたり、何かをはったりはがしたり、ちょっと漫画みたいなモチーフもあったりもして、にぎやかで元気が良い。私は、しっとりとした油絵とのギャップに、悩んだりもした。ゴリゴリの具象ではなく、モチーフの要素を使って抽象的な作品を作ろうとするとき、その長くて終わりの見えない形との戯れは不毛で、何かの支え、あるいは気晴らしが必要なのだ、ということはわかる。たぶん、ドローイングやコラージュは、彼女の絵画制作の下絵ではなく、もっと気楽な「突然去来するものやイメージの記録」なのだろう。そうして、そうしたものたちは、のちに何らかの形となって彼女の油絵の中に現れる（こともある…、逆もあるのかな）。



今回のプロジェクトに関しては、そうしたドローイングとコラージュの手法が生きている。最初にホリが、「つくりかけラボ」の空間に、きっかけとなる木を大まかに描いておく。その空間の中に来館者（その多くは地域のこどもたちだっただろう）が描いた、あるいはあらかじめホリが用意した葉っぱに来館者が彩色したもの、それからその他のいろいろなもの、虫とか人魚とかウルトラマンとか、ほとんど訳の分からないものとか、が雑然と入れられていく。ホリは「隙間に入れるんですよ。」と何度も言っていた。

もうひとつ、私は、彼女の木を描いた写生画も思い出した。戸外でたっぷり場の空気に浸りながら、白い紙の上に、木の幹と枝の重なりを描いていく。その枝と枝の隙間の空間を葉っぱのような緑で埋めたり、わざと余白にしたり、びっくりするような色を差したり、さらりと描いているような部分もあるが、相当な注意を払ってじくじく描いている部分もある。彼女は、自分の写生画を指さしながら「木の幹で区切られた空間があるじゃないですか、ここととか、ここととか、ここととか…。

そういうのを全部同じに扱いたいんですよ。」と言う。隙間を等価に扱う、ということ。

「つくラボ」の、最初、圧倒的に余白の美しかったホワイトキューブとガラスの空間は、来館者の加えたモチーフで、毎日どんどん変化していき、ついに一時手のつけようのないカオスになったそうだ。ホリとプロジェクト主催者側、担当学芸員の山根さんは、ちょっと困り顔でその話をしていたが、私は「観客の力をなめてもらっちゃ困るわい」と思ってほくそ笑んだ。しかし彼女たちは、ひるむことなく、そこからまたモチーフを足したり、引いたり、木々の隙間に入り込んでくるものたちと、ひと夏、楽しく必死で格闘したのだった。つまり、自分の描いたものも他の人の描いたものも、さまざまなモチーフが、ホリという絵描きの同じ注意を払われて、ひとつの空間の中であるべき場所にあるように。何故なら、それが絵画というものだから、である。これがインスタレーション空間ではなく、絵画に属していることは、ホリがプロジェクトの間中、壁に貼り付けて心の支えにしていた、青いポンペイの壁画のイメージを見ても明らかだ。絵画の連なりとしての空間。

このプロジェクトの、ホリや山根さんの想定をはるかに超える来館者の過剰な力が、ホリ自身のこれからの制作に影響するのかどうかはわからない。でも、階段を降りて、アトリエの1階で見せてくれた彼女の真新しいドローイングブックは、プロジェクトの空間から狩られてきた小さなイメージたちで満ちあふれていた。見ていてニヤニヤしちゃうような楽しかった夏の思い出。そしてそのむこうがわには、描きかけの油絵がイーゼルの上に乗っかっている。青を基調にした縦長の画面には、静かに奥から手前に向かってくる川の流れが予感された。この油絵に、あの暑かった夏はまだ紛れこんではいないようだ。

2022年11月11日

つくりかけラボ08
堀由樹子｜えのぐの森

会期
2022年7月13日(水)–10月2日(日)

主催
千葉市美術館

ゲスト
浅見貴子

照明演出
竹下誠司(合同会社サムサラ)

公開制作
7月13日(水)、18日(月・祝)、20日(水)、25日(月)、27日(水)、8月3日(水)、8日(月)、11日(木)、16日(火)、19日(金)、23日(火)、26日(金)、30日(火)、9月2日(金)、14日(水)、19日(月)、26日(月)、10月2日(日)

来場者数
3,936人
(大人2,543人、中学生以下1,393人)

「つくりかけラボ08
堀由樹子｜えのぐの森」報告書

執筆
堀由樹子
北村淳子
山根佳奈

撮影
加藤健
千葉市美術館

デザイン
畑ユリエ

表紙フォーマット
加藤賢策(LABORATORIES)

印刷
株式会社エイチケイグラフィックス

編集・発行
千葉市美術館

発行日
2023年3月31日